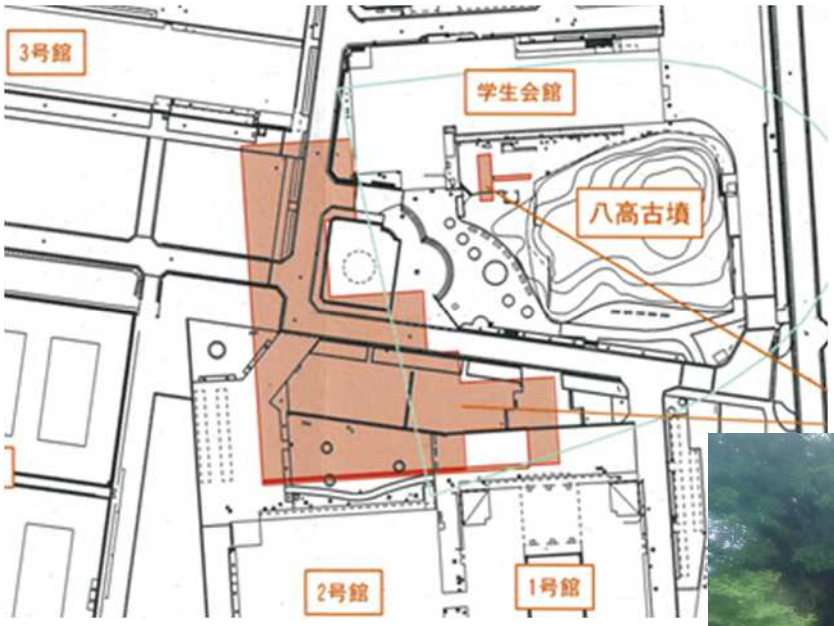
令和６年度八高古墳の発掘調査について

古墳時代は、３世紀末に始まる北海道・沖縄を除く全国各地に古墳が築かれた時代です。古墳のなかでも特に目につくのが**前方後円墳**です。この古墳は地域を支配した人物の墓であると言われています。その前方後円墳が**名古屋市立大学滝子(山の畑)キャンパス内にある**のです。それが東門のそばにある**八高古墳**です。八高古墳の現状は、前方部は大きく削りとられ、後円部もかなり崩れていて、**全長約 45m** しか残っていません。当初、**全長は約 70m** あったといわれ、ソテツ広場辺りまで古墳がおよんでいたことになります。昨年、名古屋市教育委員会の手で、八高古墳の周辺の調査が行われました。その結果、**古墳の周りを囲む溝(周溝)**の一部が確認され、なかから**埴輪が出土**しています。出土した埴輪の多くは筒状の形状をした**円筒埴輪**と呼ばれるもので、直径が 50cm もある大きなものです。学生会館の**大学史資料館**にも過去に出土した埴輪が展示されています。その特徴から、**4 世紀末から 5 世紀初め**のもので、近畿地方の影響を強く受けていることが判っています。今回の調査では**八高古墳の西側と南側を発掘調査**することになり、古墳の周溝の範囲と古墳の本来の規模を知る手がかりを得ることが期待されます。



円筒埴輪のイメージ

アミの部分が発掘調査を実施する範囲

緑のラインが予想される周溝のライン

ソテツ広場からみた八高古墳

イビソク　佐藤作成